結チーム

ゆるやかなコミュニケーションツールとなる作陶方法と活動の模索

担当：齋藤敏寿　遠藤章子　文：齋藤敏寿

協力して粘土を練る参加者

東日本大震災から４年が経過し、多様化する被災の現状を認識し、被災者・つくば市民・学生が「ゆるやかなつながり」と「やわらかい交流」を育むことができる場の創造を目指し「結の器プロジェクト2015」を企画運営した。

1. はじめに

つくば市には、東日本大震災、福島第一原発事故の影響で福島県、岩手県、宮城県から、194世帯、501名の方々が避難をして生活している(2016年1月時点)。そこで前年度までの『結』というキーワードは継承し、新たに今年度のテーマ「ゆるやかなつながり」「やわらかい交流の場」を活動の指針として、被災者の生活環境・意識の多様化をふまえて新しい作陶ワークショップ(WS)内容を企画した。人々のつながりのさらなる広がりを目指して、新規参加・つくば市民の参加を多く募ることをねらった広報活動、交流しながら作陶する方法の開発、完成した作品(器)を使用したイベント開催の3点を活動の中心とした。

対象：つくば市近辺で避難生活をしている方々とつくば市民

参加学生は芸術専門学群8名、生命環境学群1名、システム情報工学研究科1名、の計10名が参加した。人間総合科学研究科芸術専攻のTA1名、特任研究員1名、非常勤研究員1名がチームをサポートした。

2. リサーチ

今年度の企画を考える為に、過去3年間のWSに参加された方にリサーチを行った。リサーチは、現在生活しているお宅への訪問、電話、大学にお招きしてお話を伺うという3通りの方法で実施した。伺った項目は、これまでのWSの内容検証、WSへの要望、現在の生活状態などである。

また、被災者が行っている交流の場(慰霊祭、しゃべり場、グランドゴルフ、夏祭り)等に学生、教員が参加し、顔の見える交流を行った。震災から4年経過したことによる生活状況の変化・意識の多様化がリサーチから解り、原発事故のその後、双葉町、楢葉町(2015年9月に避難指示解除)、南相馬市、浪江町、大熊町の復興計画や歴史文化について、相馬焼、相馬野馬追(そうまのうまおい)の現状、浜通り地区の現在などの情報共有を行った。

チーム方針を象徴するキャラクター「なまうつわ君」
広報媒体や名刺、名札に活用した。

リサーチ風景1(学校に招いて)

リサーチ風景2(お宅を訪ねて)

3. 活動内容、経緯

3-1 視点構築演習1～5回

前年までの活動内容を学生同士で共有し、10名の学生を5名ずつ2チームに分け役割を分担した。活動方針と学生間の交流と情報の共有を図るため、昨年に行ったWSを経験し作陶行程を確認した。結チームの活動についてリサーチする内容の検討を行い前年度までのWS参加者にリサーチを実施した。リサーチの結果をチームで共有し活動方針、内容、課題解決のための方法を検討した。リサーチの結果からチームの活動方針を「ゆるやかなつながり」「やわらかい交流の場」とした。また「一人ではつくれないかたち」の器をキーワードとすることが決定された。

ミーティング風景

昨年までの活動を学生が共有する

3-2 視点構築演習6～10回

問題解決・情報発信・評価の3つの観点から企画内容を決定し、各班で下記の活動を行った。

広報班　①ポスター・チラシ・活動紹介動画の作成
　　②メディアへの掲載依頼

WS班　①使用する技法(型成形、練り込み)の決定
　　②制作するものの形を決定
　　③サンプルの制作
　　④WS実施に向けた課題のまとめ

WS班が技法や制作するものの形を決定した理由は次の通りである。

・カレー皿について
慰霊祭に参加した際にカレーをご馳走になった経緯からかたちを決定した。

・小皿について
ワークショップの実施方法を検討する中で、練習も兼ねて小皿を制作し、大きなカレー皿を制作する段階を経ることで制作がスムーズとなることを狙った。
また、食事会で副菜を盛ることのできる小皿は、使い勝手が良いこともあり、かたちを決定した。

「一人ではつくれないかたち」の実現と制作する方法として、練りこみ技法と参加者が作成する模様の相互交換と共有を成形過程に組み込み、活用することとした。また、粘土練りや練り込み粘土の作成というかたちを制作する前の準備段階もワークショップとして実施することが決定された。

4. ミーティング

全体ミーティングの他に、広報班・WS班に分かれて実施体制の検討と準備について話し合った。

Facebook、LINEを利用して、各班の進行具合、会議に出席できない学生へ情報の共有をした。

例年演習授業が終了してから各自のスケジュールを把握することの難しさが課題となっていたため、7月～9月の学生各々の予定を取りまとめ、作業工程表とスケジュール管理表を作成し予定を共有した。

慰霊祭に参加して

避難者が主催している夏祭りやグランドゴルフなどに参加

4-1 広報班の活動について

リサーチから、参加者の減少、固定化、多様化した避難者の現状などの問題がわかり、人々のつながりがさらなる広がりとなるような活動を目指して、新規参加・つくば市民の参加を多く募ることをねらった広報活動を行った。また一方的な広報ではなく、現場(被災者のコミュニティ)やメディアへの働きかけ、顔の見える親しみやすい広報(足で稼ぐ広報)を行った。

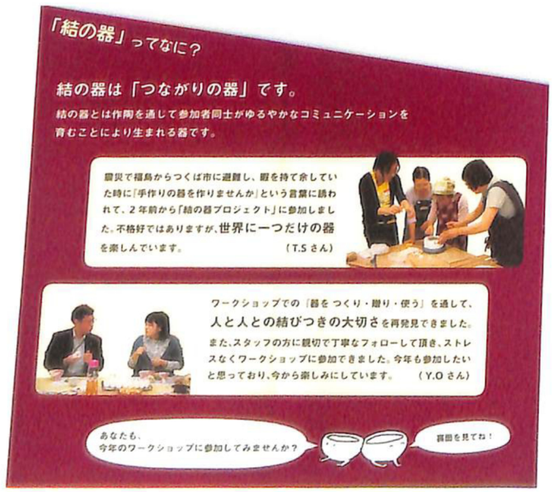
- 親しみやすいポスター、チラシの制作
- 「結の器プロジェクト」の公式Facebookページを作成
- 避難している方への資料郵送をつくば市役所へ依頼
  ⇒つくば市に避難されている方全員へ通知
  (個人情報保護法に配慮)
- 地域広報媒体の活用
  (広報つくばへのイベント掲載、常陽リビングなどの掲載)
- メディアの活用、新聞取材・ラジオ出演・SNSの活用・結チームコンセプトの動画配信
- 参加希望者への細やかな対応
- 参加者への通知、連絡分担
- 参加者の個人情報管理
- WS終了後のアンケート作成

「結の器プロジェクト」ポスター

https://www.facebook.com/yui.utsuwa/

結の器プロジェクトの紹介動画を作成しSNSで公開した

ラジオつくばに2回出演し企画の宣伝をした



広報用フライヤー

4-2 ワークショップ実施班の活動について

ゆるやかなコミュニケーションツールとなる作陶を活用した制作方法の開発について

- 作陶方法の詳細を試作から検討し工程を共有
- ワークショップ作業での使用物品、材料の検討と調達
- ワークショップ当日の作業工程及び説明方法の検討、説明用マニュアルづくり
- 器のサンプルづくり(粘土の種類、釉薬のサンプル制作)
- ワークショップ当日の役割分担の確認
- ワークショップ実施に向けて型成形の準備と運営方法の検討

作陶工程を確認しながら試作制作

常陽新聞(2015年8月14日)に掲載された記事

4-3 食事会の計画について

- 食事会の着席レイアウトの検討
- メッセージカードの制作
- 食事会の献立検討
  (慰霊祭に参加した経緯からカレーをメインに献立を検討)
- 参加者との協働と実施体制の検討

5. 実施

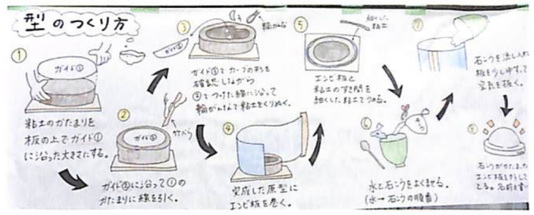
WS実施日は以下に示した通りだが、広報班とWS班のそれぞれが7~9月に入念に話し合いを重ね時間をかけて事前準備を行った。学生は、ワークショップを成功させる為に事前準備と話し合いがいかに大切か、各自が自主的に行動すること、情報共有と確認作業の重要性、そしてそれらが地道な作業だということを学んだ。また作品完成後の食事会では、参加者から食材の提供を受け、調理を協働で行い準備から実施まで行った。食事会は10月11日、震災で亡くなった方の月命日であったため、毎月恒例の慰霊祭が並木の双葉町連絡所で行われた。会場が並木と大学の2箇所に分かれるため、情報機器(テレビ電話)を活用し、場所が離れていても共有できる試みを行った。完成した器を学生が慰霊祭の会場に届け、食事を開始する時間を一致させるなど空間を超えて場を共有することができた。また過去に参加した学生(卒業生)や参加者にも食事会の案内を行い、食事会の場がプロジェクトを離れても戻ってきて各々の現状を報告できるような場となるようにした。

ワークショップ実施日程(各回の定員30名)

9月5日	(土)	10:00~16:00	制作準備(型をつくる)
9月6日	(日)	10:00~16:00	制作準備(粘土を練る)
9月27日	(日)	10:00~16:00	器制作 (模様の粘土を交換し器のかたち作り)
10月4日	(日)	13:00~15:00	釉薬付け、窯詰め(希望者が参加)
10月11日	(日)	10:00~14:00	食事会 (慰霊祭会場と大学の2会場で行った)

5回のWS参加人数の合計:138名

双葉町、楢葉町、富岡町、南相馬市、いわき市から避難されている方、つくば市民



ワークショップで使用した制作ガイド

作業説明(かたち作りについて)

熱心に説明を聞く参加者

作業を協働で行い粘土の板を作る

小学生の参加者も粘土で原型を作る

協働で制作

各々が作った模様のパーツを交換する

釉薬を作品につける

窯つめ作業

個性豊かな作品が完成した

料理の盛り付け、カレー皿と小皿

参加者と学生協働で食事会の準備

離れた場所をテレビ電話で繋いだ

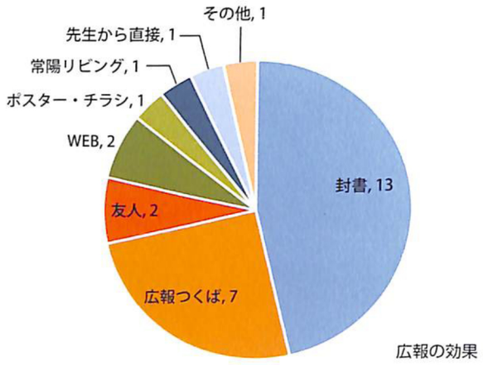
食事会風景、2つの会場で「いただきます」を同時に行った

6. 評価

当初の目的、計画を遂行できた点と、プロジェクトを行ったことによる次年度への新たな課題が示せた点が評価できる。プロジェクトに対するアンケート調査から、参加者と企画者のねらいと満足度などに対する評価の相違が明らかになり、継続的な課題が確認できたことも評価できる。

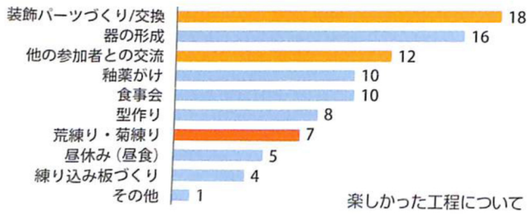
6-1 ワークショップに関してのアンケート結果

WS最終日、28名に行ったアンケートから今回のWSを知った媒体を質問したところ以下の回答が得られた。



広報は、ダイレクトメールや地元の広報誌などの媒体が効果的であった。

複数回答可で楽しかった工程を質問したところ、以下の回答が得られた。



企画側は、身体性を伴った粘土練りなどの作業が交流を促進したと評価したが、参加者は個人的な装飾パーツづくりなどの創作活動に満足度があることがアンケート結果から明らかとなった。

6-2 プロジェクトの評価

- 出身地の異なる方々や昨年参加された方々とのつながりや新たな交流が生まれた。
- つくば市に避難されてきた方すべてに、今回のようなイベントがあることを知らせることができた。またつくば市から移転した方にも参加してもらえた。
- 参加者への告知を早く行うことが出来、参加者が定員数を満たした。
- 作成した器は「ひとりでは作れないかたち」となり新たなつながりのアイテムとなった。
- WS、食事会以外での参加者同士で住所交換などの自主的な交流があった。
- 継続的な活動とするための土台作りができた。（作陶方法の確立など）
- 参加者の認識と企画側が課題とした認識の相違が明らかになった。
- 企画者が運用できるガイドブック案を作成することができた。

7. 今後の展望と課題

4年間のプロジェクトに携わった参加者、学生とのつながりを大切にし、CRプロジェクトが終了しても継続できる企画を学生と一緒に運営していきたい。そのために来年度以降へ継続的につながる為の筋道と方法を模索している。企画者が活用するガイドブックの試案を来年度以降の活動に活用したい。震災から5年半が経過する来年度の大きな課題は、経済的な支援が少なくても継続できるプロジェクトの構築と震災復興に限らず、地域に顕在化する世代間の遊離や高齢者問題を緩和するコミュニティ構築のための「結の器プロジェクト」の企画や作陶を活用した交流の試みをパッケージ化し活用することである。プロジェクトを行う場所が変化しても活動でき、チーム指針の根幹である「ゆるやかなつながり」「やわらかい交流の場」を実現し企画運営をするために、継続的で汎用性の高い方法と志を確立することが最大の課題である。

プロジェクトが継続的に活動するために

今回のシステムの応用と展開
（初対面の方や協働でつながりのある器をつくる）

プラン1　今回参加した方々や地域の方と一緒に他の場所でのイベントを開く。
プラン2　様々な土地で初めてあった人と制作を行う。

作陶を通して「ゆるやかなつながり」と「やわらかい交流の場」となるプロジェクトの拡大。企画者が活用できるガイドブックを状況に合わせて更新をしていく。

8. おわりに

「結の器プロジェクト」は、単発的なワークショップで完結しない活動を目指してきた。今年度でCRプロジェクトは終了するが、学生が思案し活動したことを今後も繋げていきたい。経済的な支援が乏しくても運営ができる仕組み作りや、授業運営としての課題を常に改善し演習授業の実施体制を確立していく。年度ごとに入れ替わる学生間の繋がりを課題とし、今回の様な試みを確実に継続していくことで、時間が経過しても残っていく陶器のようにじわじわとゆるやかにつながるプロジェクトとなるように来年度以降の活動を思考し実施していきたい。

結果として、創造的な復興支援が真の意味で成し遂げられるのではないかと4年間の活動を通じ学ぶことができた。これまでの活動が、わずかでも復興支援に役立てたのならありがたい。

そして終わらない継続的な課題として今後も取り組んでいきたい。

学生コメント

芸術専門学群3年　山ノ井梨紗子

今年度の結チームの活動は、とにかく多くの「声」に支えられたものでした。これまでの活動があるなかで、いま目を向けるべき課題とその解決方法、たくさんの発見が、参加者の方々やチームメンバーとの対話のなかにありました。私たち自身がいつも対話を忘れず、新たな挑戦をし続けることで、参加者の方にも新たな発見をもたらすことができます。その繰り返しが、結果的に活動の長期的な継続へと繋がっていくのではと考えています。

生物資源学類2年　吉田真梨

作陶はおろか、WSの運営に携わるのも初めて。プロジェクトに協力できるだろうか、参加者の方に楽しんで頂けるだろうかと、最初は不安でいっぱいでした。しかし前年度参加した方へのリサーチ、予行WS、チームでの話し合いを重ねるうちに自信が生まれました。WS本番は参加者の方々と一緒に作陶や会話を楽しみ、皆さまの笑顔に幸せな気持ちになりながら、本プロジェクトを通してチームの仲間とも参加者の方々とも、やわらかなつながりを築くことができました。

芸術専門学群4年　三宅映未

今年度の活動の初めに行ったリサーチで、被災された方個々の抱えている問題が細分化されている状況を知りました。月日が経つにつれて変化していく復興支援のニーズがある中、学生である我々ができることは何かという問いをメンバー間で繰り返すうちに出た一つの答えが「やわらかい場づくり」でした。リサーチからの問題提起、広報、WSに至るまでのすべての活動において、3年間のプロジェクトの総括として十分なものになったと思います。結チームとして2年間活動できたこと、活動の中で様々な「つながり」をもつことができたということが、今後生きていく上で大きな糧になることは間違いありません。

システム情報工学研究科社会工学専攻
博士前期課程1年　高野静香

都市計画を専攻している私は、ワークショップを企画することは日々の授業でもあります。しかし結チームでは作陶の知識、広報におけるデザインや写真のコマ割りなど芸術的専門性が光り、より豊かなワークショップとなっていました。また、これは前々年度からの積み重ねがあるからこそであり、結の器を通して人々がつながっていくのを実感しました。様々な専門性や視点を持つメンバーや参加者との交流は、とても刺激的で新たな発見や価値観を得ることのできた貴重な経験でした。

プロジェクト参加学生

芸術専門学群　4年三宅映未、永野真未、小田島果咲、野口悠梨　3年山ノ井梨紗子、砂田夏海、出口真帆、原田 薫
生物資源学類　2年吉田真梨　大学院システム情報工学研究科　1年高野静香

プロジェクトサポート

研究員：赤木春菜、芸術系 特任研究員：遠藤章子・研究員：阿部 潤、TA：大学院芸術専攻1年小池美佳子

参加者との集合写真